



THE
PRESENT
TRUTH

現代の真理

現代の真理



「しかし、群れが今必要としているのは『現代の真理』である。わたしは、使命者たちが、現代の真理の重要性を離れて、群れを一致させ魂を清めるのに何の役にもたない問題を長々と話す危険を見た」。(初代文集 p137)

「『かつてなかったほどの悩みの時』が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験--今われわれが持っておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験--が必要なのである」。(各時代の大争闘 下巻 p396)

「サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼(キリスト)の中にはなかった。これが悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである」。(各時代の大争闘 下巻 p397)

「キリストに対する信仰によって神の戒めのすべてに従うものだけが、アダムが罪を犯す前に持っていた罪なき状態に到達するであろう。彼らには、神の律法のすべてに従うことによって、キリストに対する愛を証するのである」。(6BC p1118)

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。...清めの特別な働き...この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである」。(各時代の大争闘 下巻 p140,141)

この特別な準備、経験とは何か？

どのように得られるのだろうか？

序

「『実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れのとききたからである』。キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」。(キリストの実物教訓 p47)

「与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう一度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりに入ることができるようにしたいものがあります」。(キリストへの道 p21)

私たちが変えられ、完全に至る道（方法）は何でしょう？

1. 「神よ、あなたの道（方法）は聖所にある」。(詩篇77:13 欽定訳)
2. 「わたしは道（方法）である」。(ヨハネ 14:6)

この本は4部に分かれている：

第1部では、完全に変えられる方法（道）を聖所に学びます。

第2部では、完全に変えられる時にわれわれは住んでいることを学びます。

第3部では、方法（道）である、イエス・キリストについて学びます。

第4部では十字架は今も現実であり、至聖所におけるキリストの苦しみに終止符を打つことが聖所の清めの本質であることを学びます。

贖いはわれわれの救いということ以上に、キリストご自身のためにあることを知るとき、われわれの救いの動機は自己中心的なものからキリスト中心に変わります。

「シオンの義が
朝日の輝きのようにあらわれいで、
エルサレムの救が燃えるたいまつのようになるまで、
わたしはシオンのために黙せず、
エルサレムのために休まない」。
(イザヤ 62:1)

目次

序	(3)
第1部 品性完成への道	1
第1章 第三天使の使命ー完全	3
第2章 聖所に啓示された品性完成への道	8
第3章 外庭の啓示ー回心	9
第4章 聖所の啓示ー聖化	11
第5章 至聖所の啓示ー完全	16
第6章 後の雨	23
第7章 開かれた門	25
第2部 終末の諸事件	29
第8章 預言されている覚醒の時期	30
第9章 預言の中に示された偽の後の雨	38
第10章 最後の危機	49
第11章 法令の出される前に聖所に集る	61
第3部 受肉中におけるキリストの性質 ーイエスを見るー	67
第12章 この主題の重要性	70

第13章	ヘブル書2章	72
第14章	イエスのとられた性質	75
第15章	イエスが表された性質	82
第16章	残りの教会に対する実際の教訓	87
第17章	イエスはいかにして勝利されたか	88
第18章	われわれはいかに勝利するか	93
第19章	人性と神性の結合が完成される時	100
第4部	至聖所に輝く十字架	109
第20章	イエスはいまだに苦しんでおられる	113
第21章	永遠の苦痛一人間の思い	120
第22章	聖所の清め	125
第23章	覚醒(かくせい)	134
索引		157
質問		166

第1部

品性完成への道

「私どものあがないのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の計り知れない犠牲を考えると、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません」。(キリストへの道 p10)

「われわれは全力を尽くして、われわれの目標、すなわち彼（キリスト）の品性まで到達しようと努めているであろうか。主の民はこの目標に到達したときに額に印を受けるのである。聖霊に満たされて、彼らはキリストにあって完全な者となり、記録の天使は『すべてが終わった』と宣言する」。

（アワー・ハイ・コーリング p150）

「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない」。

（各時代の争闘 下巻 p140-141）

「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない」。

（初代文集 p149）

第1章 第三天使の使命—完全

「次に、わたしは、第三天使を見た。わたしと一緒にいた天使は言った。『彼の任務は、恐るべき任務である。彼は、麦を天の倉に入れるために、麦を毒麦からよりわけて印をおし、たばねる。われわれは、こうしたことに全身全霊をかたむけ、すべての注意を向けなければならない』」。(初代文集 p221)

すべての魂は、第三天使の使命がどれほど厳粛な戦慄すべきものであるか理解しなくてはならない。これは人類に与えられる最終の使命である。これはあらゆる国民、部族、国語、民族から、死を見ずしてこの地上より天に移される備えをする聖徒の一団を集めるところの使命である。この様な人々の額には父の名が印されねばならない。彼らはまた、悩みの時のあいだ、聖所には仲保者がおられないまま生きねばならないのである。

「生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない」。(初代文集 p149)

この団体の罪のない完全な品性は預言者によって次のごとく描写されている。

「彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行

く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった」。(黙示録 14:4,5)

預言の霊は、この天に移される一団の人々が、どのようにして品性を完成していくかを明白な言葉で記録している。

「われわれは全力を尽して、われわれの目標、すなわち彼(キリスト)の品性まで到達しようと努めているであろうか。主の民はこの目標に到達した時に額に印を受けるのである。聖霊に満たされて、彼らはキリストにあって完全な者となり、記録の天使は『すべてが終わった』と宣言する」。(アワー・ハイ・コーリング p150 英文)

「キリストを信じる信仰によって神のすべての戒めに服従する者だけが、罪を犯す以前のアダムの生涯のように罪なき状態に到達するのである。彼らはすべての戒めに服従することによって、キリストに対する愛を証する」。(コメンタリー6巻 p1118 英文)

この印する使命は、百年以上も叫ばれ続けてきたが、神は未だに印を受け、仲保者なく悩みの時を通過し、墮落した人間がどんな場合でも神の律法に従えるのだということを全宇宙に証明し、ついには人間としてキリストの大いなる栄光の前に立つことのできる人々がその品性を完成するのを待っておられるのであり、この恵みの働きが神の民の心の

中に完成されるまでは福音は完結しないのである。神の四人の力あるみ使いが四方の風を引き止めて、神の僕たちがその額に印されるのを待っている。主の僕は百年以上も前に、四人のみ使いが四方の風をゆるめ始めるのを見た。その時、イエスは憐れみをもってその印されていない民をご覧になり、彼らが印を受ける備えをするために、もっと時が与えられるようご命令なされた。

われわれは神の民として実際に百年以上前の民にくらべて、まもなくその印を受けられるという状態に、はたしてなっているだろうか。再臨信徒たちの一代が起り、彼らはキリストの再臨を仰ぎ見るものと思っていたが、彼らは天に移される備えができていなかった。それで彼らは死んだのである。もう一代が起った。彼らも永遠の完全の印を受けるため努力しなかったので死んだ。もう一代が起った。そして次の代が起ろうとしている。神の民が天に移されるための使命の幻をとらえるまでは、これらの葬式はあとをたたないであろう。第三天使の特別な働きは教会を天に移すため備えることであり、単に死に備えるものではない。ルーテルやウエスレーに与えられた光は人々を死に備えさせたが、第三天使の光は死のとどかないところを通る一団の人々を完成することによって、死に終わりを来たらせるものである。

確かに神は、いつまでも神の民をただ待っておられるはずはない。それにあらゆるしるしから見て、現時代こそ最終場面に当面する時代であることがわかるのである。それゆえにわれわれは天に移されるために要求されている特別な備えをいかになすべきか、どうしても理解しなくてはならない。

これはわれわれが罪から永遠に救われるためには、印に備えなければならないということである。

もし、われわれが自らに正直であれば、ともかくどこかに根本的変化がない限り、われわれすべてが七つの最後の災いの時を通り生きぬかねばならず、またイエスが力と大いなる栄光の中に来られる時、彼にお会いせねばならないという罪のない状態にはとても達し得ないことを認めないわけにはいかない。

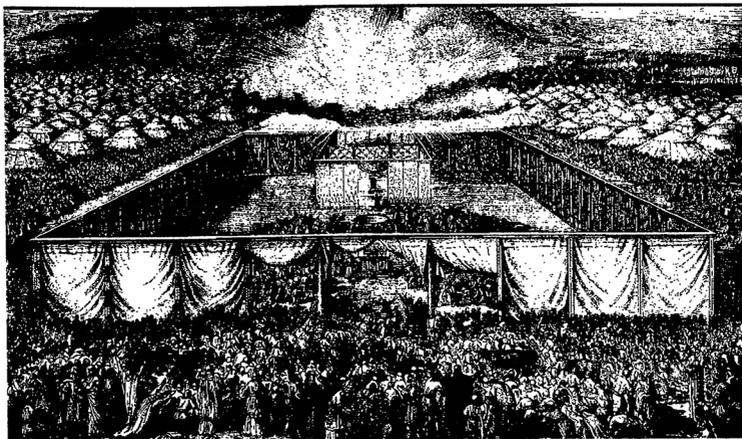
「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

預言者は語っている。『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』（マラキ 3:2,3）。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて

罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ3:4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である（エペソ 5:27）。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である（雅歌 6:10）」。（各時代の
大争闘 下巻 p140-141）

第2章 聖所に啓示された品性完成への道

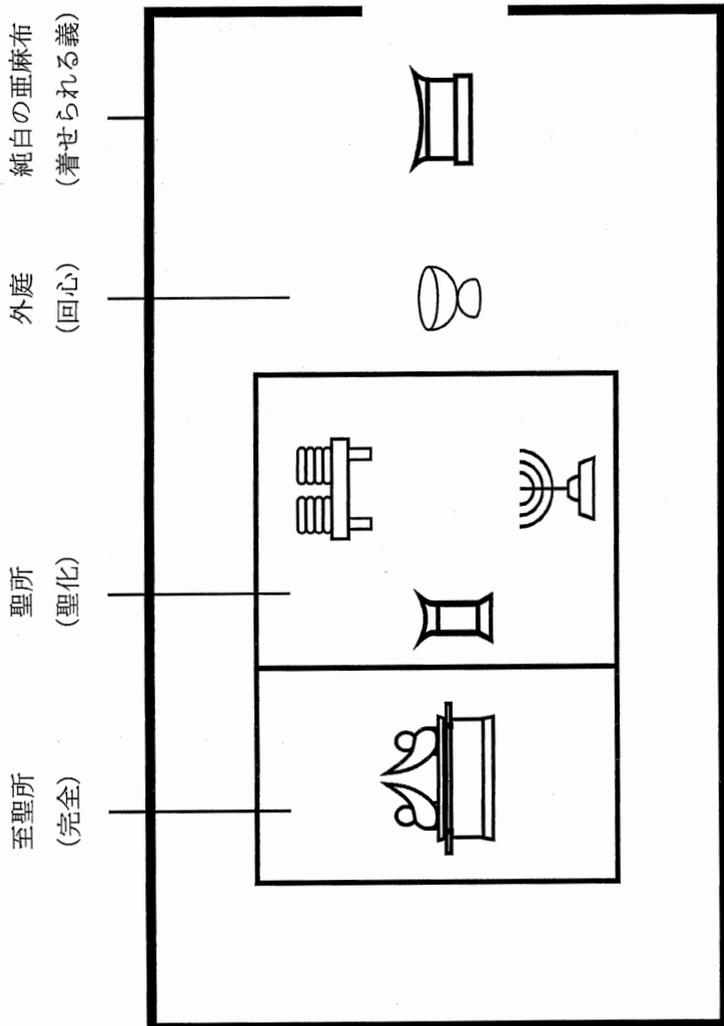


だれも、キリストのご品性の完全な罪なき状態に到達できないといって失望する必要は全くないのである。「神よ、あなたの道は聖所にあります」（詩篇 77:13 欽定訳）。ここに完全になり天に移される道が明らかに標示されているので、「そこでは、たとえ愚か者でも迷うことがない」（イザヤ 35:8 欽定訳）のである。聖所とその奉仕は人間の魂に対する神の目的として啓示された。この目的というのは、われわれがキリストに似た者に全く変えられることによって神のかたちを反映することである。もし、われわれが聖所に明らかにされている完全への簡単な段階に従いさえすれば、恵みの働きは、われわれの生活の中に完成され、われわれは神の大いなる日に立つ備えができるのである。

第3章 外庭の啓示—回心

クリスチャンの完全への道の最初の段階は、「悔い改めて本心に立ちかえる」（使徒行伝3:19）ことである。悔い改めたヘブル人は門から外庭に入り、その罪祭の頭の上に彼の罪を告白し、あがないの血によって神から赦され受け入れられた。彼は外庭の純白の亜麻布に囲まれて立った。もし、われわれがカルバリーの十字架から輝く神の愛にさからいさえしなければ、われわれは罪を告白し、生涯をキリストに結合する場所である十字架の下に、悔い改めの門を通過して導かれるのであり、その時、われわれは彼の着せられる義の純白の衣によって囲まれるのである。われわれは犠牲の祭壇の上にキリストと共に十字架につけられる（ローマ6:6,12:1）。そして「再生の洗盤（ギリシア語）」（テトス3:5）で洗われるのである。

回心とは生活の変化であると同時に新しい生涯、品性の変革でさえある。この時点でキリストの完全はわれわれに着せられたのであるが（ローマ4:2-6）、恵みの働きは生活の中にまだ完成されてはいないし、事実それは始まったばかりである。



図解 1

第4章 聖所の啓示—聖化

回心は単に一回限りの行為ではなく、品性の完成に到達するまで生活の中に日毎継続されねばならない過程でもある（教会への証 2巻 p505 英文）。信者は彼の生ける頭であるキリストのうちに成長しなくてはならない。聖所の中の香の祭壇、供えのパンの机、それに七つの燭台は祈りの経験、神の言葉を食べること、そして聖霊の油と光に満たされることを表している。これら三つの経路を通じて、神の生命が日毎に聖化するため分け与えられるのである。

日毎の回心である聖化は完全とはちがうが、しかしそれは、恵みの中に完全に向かって成長しているのである。

「ヨハネは真の聖化の祝福を味わったのであるが、注目すべきことは、この使徒は自分には罪がないとは主張しなかったことである。彼は完全を求めていたのである...」。（サンクティブアイド・ライフ p48 英文）

ある人々は、ただ主が彼らに十分な時間さえくたされれば普通の聖化の方法で罪なき完全に到達できるものだと考えている。しかし、靈感は特に次のごとく述べている。

「人間は彼の生ける頭であるキリストにまで成長する。それは瞬間の働きではなく、生涯の働きである。神の生命のう

ちに日々成長しても、彼は自分の恩恵期間が閉じるまでは、キリストにある完全な人間の姿には到達しないのである」。
(教会への証 4巻 p367 英文)

恩恵期間中の聖化の過程において信者が罪なき完全を経験しないということには二つの理由がある。

1. 真のクリスチャン経験において、「イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです」(キリストへの道 p81)。このために真のクリスチャンは、彼の生涯にこのようなかくれた罪深さを認めるようになるのである。
2. 真の神の子らは、神に最も近く生きてさえも「**自分たちの性質の罪深さを告白してきた**」(患難から栄光へ 下巻 p264) 聖なる使徒たちや預言者たちのようになるのである。アダムとエバが罪を犯した時、「彼ら^らが得た大いなる知恵は罪の知識と罪悪感とであった」(生き残る人々 p51)。罪責(罪悪感)は、神に対する悔い改めと主イエス・キリストに対する信仰を持ったとたんに取り除かれる。しかし悪^の知識は、人間が自分の恩恵期間を通じて持つものである。それは単なる悪についての知識ではなく、心における悪の実際^的経験である(教会への証 5巻 p504 英文)。この悪^の知識が人間の性質に罪深い状態と罪への傾向をもたらしたのである(教育 p16-19,21)。

この罪深さをすべての人が受け継いでいるばかりか、自分でそれを作り上げてさえいるのである。すべて繰り返し犯される罪は、さらに人の心に罪の知識を印象づけている。「ユダの罪は鉄の筆、金剛石のとがりをもってしるされ、彼らの心の碑と、祭壇の角に彫りつけられている」(エレミヤ 17:1)。もちろん神は、天の書にも罪の記録を持っておられる。しかしここで忘れてならないことは、たとえ罪は告白され、その罪責は心から取り除かれたとしても、なお心も確かに記録を持っているということである。どのようにすべての心が罪の記録を持っているのだろうか。次の文に注目してみよう。

「『その時あなたがたは自身の悪しきおこないと、良からぬわざとを覚えて、その罪と、その憎むべきことのために、みずから恨む』と主が言っておられるのは、主がおゆるしになった人々、すなわち主が御自分の民としてお認めになった人びとに対してである(エゼキエル 36:31)」。(キリストの実物教訓 p140-141)

「主は、悔い改める罪人をおゆるしになるだろうし、また実際おゆるしになるが、しかしゆるされても、その魂はそこなわれている」。(各時代の希望 中巻 p8)

「あなたは今悔い改めることができるであろう。しかしたとえ赦しがあなたの名前のところに書かれたとしても、あなたはたいへんな損失をこうむることになる。なぜならあなたが自分の魂の上につくった傷は残るからである」。(教役者への証 p447 英文)

「悪しき思いを持つものはその魂の上に刻印を残す」。(クリスチャン教育の基礎 p195 英文)

「すべてのクリスチャンは悪い習慣との激しい戦いを経験する。彼は自分の不信仰、品性の欠点、放縱になる傾向に打ち勝たねばならない。光、警告、訴えに対する彼の長い間の反抗はその生涯にその傷跡を残している。そのため、たとえ主は彼をお許しになっても彼は自分自身をゆるすことはできないと感ずるのである」。(レビュー・アンド・ヘラルド 1891年1月13日 英文)

これは、おのこの心の中に実際に罪の記録があることを示す十分な証拠である。それぞれの罪が心に悪の知識を印象づけている。新生と日毎の清めの経験によって信者は多くの遺伝的またはあとから自分でつくった悪への傾向を品性から断ち切るであろうが、それでもその罪の記録は残るのである。

それで、(1) **かくれた罪深さのゆえ**、(2) **罪の記録のゆえに罪なき品性の完全は、われわれが聖所の象徴を用いるところの日毎の経験では到達することはできないのである。**

さて、もし回心においても、また日毎の清めの歩みにおいても、完全を経験することはできないなら、いったいいつ、どこで完全の経験は得られるのであろうか。

ある人々は、主は、ある啓示されていない恵みの源によつ

て恩恵期間が永遠に閉じる時、彼の民にそのような経験をお与えになるのだと主張している。それは真実ではない。なぜならキリストはその時ただ「聖なる者はさらに聖なることを行うままにせよ」（黙示録 22:11）と言われるのである。われわれは「生きている義人は恵みの時が終わる前に神の印を受け」（セレクトッド・メッセージ 1巻 p76）と言われていることに注意しなければならない。

また別の人々は、この完全の経験が回心においても達せられず、また「日毎」の清めの過程でも達せられず、さらに恩恵期間が閉じる時にキリストが香炉を投げられる時でもないとしたら、このような状態は再臨の時キリストが「卑しい体」を変えられる時に可能だと考えているのである。

これは真実であろうか。否、否である。人間の心に対するすべての恵みの働きは、イエスが来られる以前に完成されなくてはならない。「キリストが来られる時、われわれの品性は変えられない。この卑しい体は変えられ、そして彼の栄光の姿に似せられるのである。しかし、その時、われわれの中に道徳的变化は起らないのである」。（レビュー・アンド・ヘラルド 1888年8月7日 英文）

もし、この完全の経験が回心においても、普通の清めの過程でも、また人間の恩恵期間が閉じる時でも、イエスの再臨の時肉体が変えられる時でもないとしたら、一体どこで、いつ、それは行われるのであろうか。

第5章 至聖所の啓示—完全

神の大いなる日に民を完全にする使命を持つ**第三天使は至聖所を指さしている。**



「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返した時に、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。... わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、... 天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た」。(初代文集 p414-415)

それゆえもし、われわれが信仰によって至聖所に心を向けるならば、第三天使が要求している経験がどのようなものか明らかに理解できるのである。聖徒を完全にする**至聖所の働きとは何であろうか。**

「地上の聖所の清めのために、祭司が、一年に一度至聖所にはいったように、イエスは、ダニエル書8章の二千三百日の終わり、すなわち、1844年に、天の至聖所に入り、彼の仲保の働きによって恵みにあずかるすべての者のために最後の贖いをなし、こうして、聖所をお清めになるのであった」。(初代文集 p413)

昔の奉仕において大祭司は、恵みのみ座に血を注ぐことによってイエラエルのあがないをするため、年に一度至聖所に入った。すべての者が祈りと断食とをもって深く心を探りつつ聖所の周囲に集らねばならなかった。魂を悩まさない者はだれでも会衆から断たれたのである(レビ 23:27-30)。この象徴的奉仕において、イスラエルの罪が聖所から取り除かれたばかりでなく、あがないの日の条件に従う者は全く清められた。

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」。(レビ記 16:30)

それで今日、黙示録14章の使命は次のごとくわれわれに宣言している。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ、神のさばきの時がきたからである...」。これは、われわれが大いなる大祭司の働きと地位について理解し、天の聖所で大いなるあがないの働きが進行している間、われわれに要求されている義務が何であるかを知ると命じている。あがないの日にイスラエルの野営にラッパが鳴りわたったように、今日のイ

スラエルにもラッパの音が聞こえるのである。

「シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ、主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え...」。 (ヨエル 2:15-17)

ヨエルのこの聖句を注解して主の僕は次のごとく述べている。

「いくらかの人々が強い信仰と苦悩の叫びをもって神に懇願していた。彼らの顔色は青白く、深い苦悩が刻まれ、内なる戦いを表していた。確固たる大なる熱意が彼らの表情に表されたが、一方額からは大粒の汗がしたたり落ちた... わたしが見ていると、ある者は苦悩と懇願の働きに参加せず、彼らは無関心で不注意のようであった... 神のみ使いたちは彼らから離れていった〔自らの魂を悩まさない者たちは断たれるであろう〕」。 (教会への証 1巻 p179-181 英文)

われわれは、このあがないの日に悔い改めをもって魂を悩ます (欽定訳) 人々の中に入るのであろうか。それとも不注意で無関心な者たちの中に入るのであろうか。キリストに心から従う人々は至聖所での彼の特別の働きを理解し、信仰によって彼に従って入って行くのである。神の民が要求されている深い悔い改めと魂を低くするという経験をするために、主は「恵みと祈りの霊」とを彼らにそそがれる。預言の霊よ

りの一節は、彼らが信仰によって聖所のまわりに集まる時、神の民にのぞむ魂の苦悩を描写している。

「ヨシュアとみ使いに関するゼカリヤの幻は、贖罪の大いなる日の、最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩に陥る。神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持っているものに対して、龍とその軍勢は激しい怒りを発する。…神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防壁である。ヨシュアがみ使いの前で嘆願したように、残りの教会は、心へりくだり揺るがぬ信仰をいだいて、彼らの助け主イエスによって、赦しと救出を嘆願するのである。彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。そして、今にも絶望するばかりである。

誘惑者サタンは、ヨシュアのそばに立ったように、彼らのそばに立って告発する。彼は、彼らの汚れた衣、彼らの品性の欠陥を指摘する。彼は、彼らの弱さと愚かさ、忘恩と罪、彼らがキリストに似ておらず、贖い主の栄えを汚したことを示す。彼は、彼らの状態は絶望的で、彼らの罪のしみは洗い去ることができないと思わせて、恐怖に陥れようとする。彼は彼らの信仰を失わせて、彼の誘惑に屈服させ、神への忠誠から引き離そうと望むのである」。(国と指導者 下巻 p193-194)

われわれは、すべての罪が天に記録されているばかりでは

なく、魂に印象、傷跡、記録、悪の知識をどのように残しているかを見てきた。神の民が自ら信仰によってさばきに出頭する時、彼らはこのことをすべて認めるのである。昔のあがないの日においては、「...年ごとに、いけにえによって罪の思い出がよみがえって来た」（ヘブル10:3）。民は聖所のまわりに集まり、深い悔い改めと心を低くしてその年の罪を反省したのである。今日も同様に、神の民が聖所のまわりに集まる時、そこには「罪の思い出がよみがえって来るのである」。

「審判の霊と滅亡の霊（焼きつくす霊—欽定訳）」（イザヤ4:3,4）が神の民に生涯の罪深さを十分に意識させる。彼らの罪を前もって告白し、捨て去った者だけが、大いなるふると苦悩の経験に耐えることができる。その民が「砕けた、悔いた心」を持つ時、イエスはさばきで彼らの名を取り上げ、彼らのために最後のあがないをなされるのである。続けてヨシュアと天使の記述を読んでみよう。

「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するとき、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる。（ゼカリヤ3:4）キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。...サタンが告発をしていたとき、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の

印をおしていた」。(国と指導者 下巻 p196)

このように、さばきの目的が単にキリストに従うことを告白した者の生涯を調査して、永遠の生命を受けるにふさわしいかどうかを見るばかりでなく、キリストはさばきにおいて、彼の民のために最後のあがないをなさり、彼らの罪を取り去って下さることが理解できるのである。キリストは、その民を永遠に救われ、彼らに生ける神の印が押されることによって、さばきを通して勝利が獲得されるのであるが、そのことが次の靈感の言葉の中に述べられている。

「彼は義をもってあなたの民をさばき、公平をもってあなたの貧しい者をさばくように。…彼は民の貧しい者の訴えを弁護し、乏しい者に救いを与え、しえたげる者を打ち砕くように」。(詩篇 72:2,4)

「しかし審判が行われ、彼(罪の人)の主権は奪われて、永遠に滅び絶やされ」。(ダニエル 7:26)

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」。(レビ 16:30)

「わたしこそ、わたし自身のために、あなたがたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」。(イザヤ 43:25)

「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それは、わたしが残しておく人々を、ゆるすからである」。 (エレミヤ 50:20)

「大いなる最後の報いの日に...このとき、真に悔い改めたすべての者の罪は、キリストの贖罪の血によって、天の書物から消される。こうして、聖所から罪の記録が除かれ、清められるのである。...もはや思い出すことも心に浮ぶこともなくなるように...」。 (人類のあけぼの 上巻 p422)

「...一度きよめられた以上、もはや罪の自覚がなくなるのである…彼(キリスト)は一つのささげ物によって、きよめられた者たちを永遠に全うされたのである」。 (ヘブル 10:2,14)

「彼らの罪は、前もってさばかれて、消し去られている。彼らは罪を思い出すことができない」。 (各時代の争闘下巻 p393)

それゆえ、至聖所におけるイエスの特別な奉仕によって、永遠の完全すなわち恵みの完全のみ業が、その最後のとりなしによって恵みを受けるにふさわしい人々に与えられるのである。神はその民が彼らの罪を捨て去り、み前に魂を悩ますようにと聖所に召しておられる。そのときキリストはさばきにおいて彼らの名を取り上げ、彼らのために神のみ前に立って、最後のあがないをなさるのである。そこで記録、すなわち彼らの性質から悪の知識を除去し、彼らに完全な罪なき印が与えられるのである。

第6章 後の雨

われわれは最後のあがないのみ業、すなわち**罪の除去と後の雨**との関係について知らなければならない。ヨエルが聖所において魂を悩ますようにと神の民を呼び出した後に「いながの食った年をわたしはあなたがたに償う」と神は約束しておられる。すなわち彼の民に後の雨を降らせて、魂の上にある罪のもたらした恐るべき損害を回復なさると言われるのである（ヨエル2:23-28）。ペテロはこの預言を注釈して、「だから、自分の**罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めのときがきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである**」（使徒行伝 3:19, 20）と述べている。これが、イスラエルの経験から罪を除去する後の雨である（イザヤ 4:2-5）。

キリストは天の聖所で奉仕しておられる。一方、み霊は魂の宮で奉仕しておられ、その奉仕のみ業につながる個々人の魂にキリストのみ業の恵みを適用しておられるのである。こうしてキリストが天の書より罪の記録を取り除けば、み霊は魂の宮において、それに相応するみ業をなさるのである。同様に、またキリストが志願者をさばかれ生命の書にその名をとどめられると、み霊はその心に印を押し、そこで神の道徳的かたちがとどめおかれることとなるのである（エペソ 4:30 教会への証 3巻 p267 英文）。これが生涯に恵みのみ業を完成する後の雨のバプテスマであるということは次の文に明らかにされている。

「季節の終わり近くに降る後の雨は穀物を熟させ、刈り入れに備える。…穀物が熟するということは、魂の中に神の恵みのみ業が完結することを表している。聖霊のみ力によって神の道徳的かたちが品性に完成されるのである。われわれは全くキリストに似たものに変えられる。…先の雨がその働きをしないならば、後の雨は完全の実を成熟させることはできないのである」。(教役者への証 p506 英文) (初代文集 p439-440 参照)

それゆえ、後の雨は至聖所の祝福であり、われわれが必要な備えをし生ける者のさばきに出頭し、最後のあがないを受ける時、後の雨は降るのである。その時、罪は「主のみ前から慰めのときがきて」(使徒行伝3:19)除去されるのである。み霊の油注ぎによって神の印を受ける人々は、第三天の大いなる叫びにおいて、最後のあわれみの使命を宣べ伝えるのである(これは聖書の中のいくつかの大いなる預言の中に明らかにされている。イザヤ44:22, 23とイザヤ55:5, 62:2, 3、黙示録3:12, 14:1とを比較、またエゼキエル43:1-3と黙示録7:2, 18:1とを比較)。大いなる叫びの期間中に回心する人々は同じく生ける者のさばきに入り、罪の除去を受け、後の雨のバプテスマによって印を受けるのである。最後の魂が印された時、永遠に恩恵期間は閉じられる。これらの慰めの時がきて、み業が終わる時の速さは適当に描写することはできない。神はただひたすら、その民が大いなるあがないの日の現実に目覚めるのを待っておられる。

第7章 開かれた門

1844年にイエスは至聖所に入られた。そしてご自分の民を招待して、「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」（黙示録3:8）と言われる。われわれはイエスと共に至聖所の経験に入るように招かれている。第三天使は、われわれを至聖所へと指し向けている。イエスはご自分の民をさばき、彼らの罪を除去し、永遠の救いの印を彼らに与えようと待っておられる。み使いたちは神の民が印されるのを待って戦いの風をとどめている。それなのに、ラオデキヤは眠っている。彼女はいまだ成就されていない大なるみ業を知らないのである。それゆえ神は、その僕たちに「シオンでラッパを吹き鳴らせ」と命じられるのである。教会に「すべての用意ができました。さあ、婚宴においでください」（マタイ22:4）。との最後の招きが来るのである。それゆえ、われわれは目覚めよう。そして主が最後のあがないにおいて、われわれを永遠に全き者として下さるように、同じ尊い信仰の者ととも至聖所に行って必要な備えをし、神のみ前に懇願しようではないか。イエスのために、もうこれ以上遅れることのないようにしよう。

「真の信仰は、約束された祝福が、実現しそれを感じることが出来る前に、それをつかんで自分のものとする。われわれは信仰をもって、第二の幕の中に、われわれの願いをささげ、信仰によって、約束された祝福をつかみ、それを自分た

ちのものとして主張しなければならない。それから、われわれは、祝福を受けることを信じなければならない。なぜならば、信仰が祝福をつかんでいるのであって、み言葉にあるとおりに、それはわれわれのものだからである」。(初代文集 p151)

「キリストの恵みによってわれわれは強められ、成長させられる。われわれは現在は不完全であるが、主にあって完全なものとなることができる」。(ユース・インストラクター 1895年11月5日 英文)

「キリストは、生涯を通じて到達しなければならないクリスチャン品性の最高の完全性をわれわれに示している。...この完全についてパウロは『わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではな』い(ピリピ 3:12-15)と言っている。われわれは、いかにして救い主イエス・キリスト——われわれの偉大なる教師によって指定された完全に到達できるだろうか。主のご要求に応じ、高い標準に到達できるだろうか。われわれはできる。さもなければ、キリストは、われわれにそうするようにお命じにはならない」。(書簡 p148 1902年 英文)

「キリストは民の罪から天の宮を清めておられる。それで、われわれは地上でその道徳的汚れから魂の宮を清めることに彼と調和して働かなくてはならない」。(レビュー・アンド・ヘラルド 1890年2月11日 英文)

「キリストの命令は約束である」。(各時代の希望中巻 p111)

「これは、大いなるあがないの日であり、われわれの弁護者は父なる神のみ前に仲保者として嘆願しておられる。自分を自己義認の衣でつつむ代りに、われわれは日々自ら神のみ前にへりくだり、自分自身の個々の罪を告白し、罪のゆるしを求め、そして神のみ姿を反映するために、われわれの魂を備える働きにおいて、キリストと協力するものとなるべきである。もし、われわれが天の聖所に入り、恐れおののいて自分の救いの達成に努めるためキリストに結びついていないならば、われわれは聖所のはかりではかられ、足りない者と宣言されるであろう」。(コメンタリー 7巻 p933-934 英文)

「われわれは、あがないの日に生存しており、民の罪から聖所を清めるキリストの働きに調和して働かなければならない。...われわれは、信仰によって天の聖所で働いておられるわれわれの大祭司を見るところの働きを人々の前に今示さなければならない。天の法廷の働きにイエスと一致しない人々、またすべての汚れから魂の宮を清めないところの人々は、神の敵に荷担している者である」。(レビュー・アンド・ヘラルド 1890年1月21日 英文)



至聖所



聖所

バビロンは倒れた

神の裁きの
時は来た

神の戒めと
イエスの信仰

第一天使

第二天使

第三天使